

「関わる力」を育む小中一貫教育の推進

—児童生徒の主体性に焦点を当てて—

野母 佳澄^{*1}・静屋 智

Promoting integrated elementary and junior high school education to foster “ability to relate”:
Focusing on Students’ Autonomy

NOMO Kazumi^{*1}, SHIZUYA Satoru

(Received March 31, 2025)

キーワード：小中一貫教育、主体性、カリキュラム・マネジメント、熟議

はじめに

筆者の勤務する下関市立本村小学校の児童数は9年間で半減し、令和4年度には初の複式学級が設置された。授業形態の変化や児童数の減少による人間関係の固定化により、児童の主体的な学びやコミュニケーション力向上の必要性を実感していた。また、Society 5.0の時代を見据え、「めざす子どもの姿」を明確にし、地域縦がかりで教育活動に取り組む重要性を再認識した。

児童生徒数の減少を背景に、令和9年度に施設一体型小中一貫教育校として本村小学校、西山小学校と玄洋中学校を統合した「玄洋学園」の開校が決定した。不登校児童生徒減少、中1ギャップの解消という課題解決に向けても、さらなる小中一貫教育の充実や小中一貫カリキュラムのブラッシュアップが必要である。

本研究では、小中一貫教育の充実に向けた組織マネジメントの在り方を明らかにし、児童生徒・教職員・保護者・地域の当事者意識を高めることをめざす。また本中学校区の課題である「関わる力」の向上をめざし、子どもの主体性を引き出すカリキュラム・マネジメントに着目し、研究を進めることとした。

1. 研究の背景

Society 5.0の時代の到来が予測され、先の見えない時代を生きるこれからの中学生たちに求められる力として、非認知能力が注目されている。日本生涯学習研究所（2018）によると、文部科学省や内閣府、OECDといった各機関が提唱する「21世紀型能力」として定義づけできると考えられる10の提言の中から抽出された19の能力の分類から、これまで学力として評価されてきた読み・書き・計算などの認知能力から、測定や評価が難しかった非認知能力へと、求められる力が大きく変化していることが分かる。

平成27年（2015）に学校教育法等の一部が改正され、平成28年度（2016）から小中一貫教育が制度化された。①学びの連続性を確保すること②小学校から中学校への進学時に生じる環境や生活の変化への適応を支援し、「中1ギャップ」を解消すること③教育内容や指導方法の工夫による学力向上を図ること④小中学校の教員が連携を強化し、教育の質を向上させることを目的とした小中一貫教育が全国で推進されている。筆者の勤務する下関市では、これまで各中学校区で進めてきた小中連携教育をさらに発展させ、すべての小・中学校で小中一貫教育に取り組み、「真につながる義務教育」の実現をめざしている。具体的には、①めざす子ども像、②カリキュラム、③指導方法、④児童生徒、⑤地域・家庭の5つのつながりを重視している。下関市小中一貫教育研究推進校であり、「新しい学校づくり推進委員会」に属する中学校区として、小中一貫教育を推進していく方法を模索する必要がある。

*1 下関市立本村小学校（令和6年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻学校経営コース）

2. 研究の目的

研究の取りかかりとして、玄洋中学校区における小中一貫教育の推進に向け、本村小学校の強みと課題をテーマに SWOT 分析を行った（図 1）。本村小学校の強みとして、地域を巻き込んだ伝統の継承が行われていること、特に平家踊りなどの文化活動が地域と連携して実施されており、多種多様な地域教材に恵まれた環境であることが確認できた。一方で、課題として浮かび上がったのが、小中一貫カリキュラムである「ふるさと玄洋学」の紙キュラム化である。コロナ禍を経て、それぞれの活動がどのように関連しているのかが十分に共有されておらず、カリキュラムとしての系統性が確保されているのかという疑問が生じた。また、本村小学校は小規模校であり、フットワークの軽さというメリットがある一方で、人間関係の固定化という課題が挙がった。児童数が減少する中で、子どもたちの社交性の低さや受け身の姿勢が指摘された。

内的強み (Strength)	内的弱み (Weakness)
<ul style="list-style-type: none"> 新しいことにも挑戦しようという意欲があり、共通理解も図りやすい。（s1） 小規模のためフットワークが軽い。（s2） 	<ul style="list-style-type: none"> 単学級、少人数で育ったことによる人間関係の固定化。低い社交性。受け身。（w1） お互いの取組をほとんど知らない。学校間の意識の格差も大きい。（w2）
外的強み (Opportunity)	外的弱み (Threat)
<ul style="list-style-type: none"> 熱心で協力的な地域の方が多い。（o1） 地域を巻き込んだ伝統の継承が行われてあり、地域教材が豊富にある。（o2） 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の良さを生きしきれていない。（t1） 地域ボランティアの固定化、高齢化。（t2）

図 1 本村小学校 SWOT 分析（令和 5 年 4 月実施）

そこで、組織マネジメントという視点から 3 校の取組を見直し、学校・地域連携カリキュラムや「ふるさと玄洋学」のさらなる充実とプラスアップを図り、学びの場や方法を工夫することでの、小中一貫教育の強化を第 1 の柱とする。また小中一貫教育を推進する児童生徒の現状を踏まえ、非認知能力の育成、特に「主体性」と「自己肯定感」を高めることに着目することとした。玄洋中学校区で育てたい力である「関わる力」の向上を主体性の発揮と捉え、子どもたちが当事者意識を持って学習に取り組めるようなカリキュラム・マネジメントを実践することで、自己肯定感や主体性の向上が期待できると考える。これを第 2 の柱として、主体性の発揮に重点を置いたカリキュラム・マネジメントの推進に取り組むこととした。

3. 小中一貫教育を推進する組織づくり

3-1 組織の再構成 小中一貫教育指定校連携委員会の設立

小中一貫教育の推進にあたり、まず課題意識を持ったのが、教職員の当事者意識の醸成であった。令和 5 年度当初は当番校である原籍校が中心となって様々な提案を行っていたものの、情報共有の難しさを感じ、教職員間、学校間の意識の差も大きくなっていた。そこで小中一貫教育を進めるフレームを見直し、誰といつ、何を深めていくのか明らかにすることとした。新しいチームを立ち上げることも案に挙がったが、負担感の軽減をねらい、今ある部会を活用し組織の再構成を行うこととした。

それぞれの部会の取組の方向性については下関市の中中一貫教育ルーブリックの 7 つの視点を知・徳・体の 3 部会に振り分け、評価指標や取組の方向性を確認するものとして活用することとした。7 つの視点を振り分けていくと、保健・体育の視点が少ないことが分かり、新たに 8 つ目として「体」の指標を作成した。また、それぞれの部会の気づきを踏まえて加筆修正したものを玄洋中学校区版としてまとめ活用していくこととした（表 1）、市の「新しい学校づ

表 1 しものせき版小中一貫教育ステップ表 玄洋中学校区 ver.

総務		知		徳		体	
①グランドデザイン （学校教育目標）	②組織づくり	③CS	④校内研修	⑤学習指導	⑥生徒指導 （★心の教育）	⑦学校行事 (児童会・生徒会活動)	⑧体育・保健関係
<p>□ 中学校区としての組織 □ 中学校区の学校運営委員会が全教職員と共有され、日々の教育活動において県規化されている</p> <p>△ 目標を可視化する評価指標を立て、PDSAサイクルに基づいて取組改善をしている</p>	<p>□ 中学校区としての組織 □ 中学校区の学校運営委員会が開催され、各校主導で定期的に開催され、地域連携・協働しながら教職活動が展開されている</p> <p>△ 目標を可視化する評価指標を立て、PDSAサイクルに基づいて取組改善をしている</p>	<p>□ 定期的に会合開催が開催されている □ 中学校区で道徳の共通の内容項目について、連携した実践がなされている</p> <p>△ 共通の学習のきまりを定め、実践し、POCAやイクリム等で取組改善を基づいて取組改善をしている</p>	<p>□ 中学校区で会合開催が開催されている □ 中学校区で道徳の共通の内容項目について、連携した実践がなされている</p> <p>△ 共通の学習のきまりを定め、実践し、POCAやイクリム等で取組改善を基づいて取組改善をしている</p>	<p>□ 中学校区で新体力テストの結果を分析し、改善者のための取組を行っている</p> <p>△ 中学校区で「生徒会・運動会」を開催する部会で、各校主導で実践している</p> <p>△ 中学校区で「生徒会・運動会」を開催する部会で、各校主導で実践している</p>			
<p>△ プロセス3 （準備期） 小1→小3</p>	<p>△ プロセス2 （一歩期） 小1→中3</p>	<p>△ プロセス1 （達成期） 小1→中1</p>	<p>□ 目指す子ども像が共有され、中学校区のグランドデザイン・教育目標が策定されている</p> <p>△ 各校のグランドデザイン・教育目標が共有されている</p>	<p>□ 小中学校で共通した取組が実現される（会員登録、会員登録料等）があり、全教職員が開催がある（学期に1回程度）</p> <p>△ 各校の会員登録が実現される（会員登録、会員登録料等）があり、全教職員が開催がある（学期に1回程度）</p>	<p>□ 目指す子ども像が向けて何ができるか（学校、保護者、地域）があり、全教職員が開催がある（学期に1回程度）</p> <p>△ 各校の会員登録が実現される（会員登録、会員登録料等）があり、全教職員が開催がある（学期に1回程度）</p>	<p>□ 定期的に中学校区内で会員登録会を開催し、互いの連絡のよさを交流することができる</p> <p>△ 中学校区の学習・地域連携カリキュラムが作成されている</p> <p>□ 中学校区で家庭学習（学びの手引きを活用したカリキュラム）が実現されている</p> <p>△ 中学校区に贈る便りが発行されている</p>	<p>□ 9年間の系統性、連続性を重視し、発達の段階に応じた横のつながり（各教科の横のつながり）と各教科の横のつながり）で、各校独自の特色を活用したカリキュラムを編成することができる</p> <p>△ 中学校区で家庭学習（学びの手引きを活用したカリキュラム）が実現されている</p> <p>□ 中学校区共通の内容項目が設定されている</p> <p>△ 中学校区の会員登録が実現されている（学期に1回程度）</p>

くり推進委員会」とも共有を図った。

それぞれの部会において役割が明確となったことが各部会の主体的な動きへつながり、教務部会からは中長期的なスケジュールの提案が行われた。文部科学省（2023）『小学校と中学校との連携についての実態調査』において75%の市町村教育委員会が小中連携・一貫教育推進上の課題として小中の教職員間での打ち合わせ時間の確保だと回答している。この教務部会の提案により3校で集まる時間が保証され、見通しをもって3校で評価改善サイクルを回すことにつながったことは大きな成果だと考えている。

徳部会では月に1度の生徒指導情報交換会が設定され、情報共有が密にできるようになり、生活のきまりの統一により、指導の一貫性をもたらすことにつながった。

また研修主任を中心に3校校長会や連携委員会を経て、グランドデザインの重点取組事項の中の「関わる力」の育成を最重要取組事項とすることになった。それに伴い、3校の研修テーマを「関わる力を育む小中一貫教育の推進」とすることが提案され、それぞれの学校でも承認を得た。学習指導要領において「関わる力」とは、特に「資質・能力」の一つとして挙げられているもので、人間関係の構築や社会的なつながりを形成するために必要な力をさす。具体的には、コミュニケーション能力、協働する力、共感力、対人関係の調整力、社会的責任を果たす力等が挙げられる。「関わる力」は、個人が多様な社会で他者と共生し、自らの可能性を広げるための基盤となる重要な力とされているものの、やや抽象的であるため、各学校にて具体化し、それを持ち寄ることになった。そして作成されたのが「玄洋校区つけたい力指標」である。「関わる力」を進んで書く力、豊かに読む力、確かに聞く力、はつきりと話す力、ともに話し合う力の5つに具体化し、発達段階に応じためざす子どもの姿を文章化した（表2）。同じ研修主題のもと、作成された指標を活用した授業づくりを行い、3校参加の研修支援訪問の機会を活用して、小中一貫教育について研修を深めていくことにつながった。

3-2 評価改善サイクルを回すためのシステム構築

何で評価し改善を図るかという点についても見直しを行った。共通の学校評価を設定し、グランドデザインの具体化であるスタンダードデザインの評価と改善をする機会を明確に小中カリマネミーティングとして協議する機会を設けた。小中一貫カリキュラムのブラッシュアップに向けても、年に2度の小小連携会議を設定した。年度初めには同学年担任同士で1年間の交流計画をたて、年度末には評価改善を行うこととしている。さらにICTを活用を提案し、資料のやり取りや打ち合わせ時間の短縮にもつなげることができた。教師の視点だけでなく児童生徒の視点からもカリキュラムの充実を図ることが今後の課題だととらえている。そのためには評価基準、評価材料の設定が鍵となる。活動後の子ども達の実態をどのように把握し、活用を図るのかという視点の必要性を感じた。

「関わる力」の変容を可視化することと、中1ギャップの軽減をめざした実態把握を目的として「小中一貫アンケート」を発案した（図2）。小小・小中交流の取組に対する満足度を100点満点で数値化し、子どもたちが自らの変化を振り返ることができるよう設計した。これは、メタ認知の促進を意図したものであり、非認知能力を数値化することで、子どもたちは自己の変容に気づき、次の目標を立てるための根拠を得ることができる。さらに、数値の変化を通して、自らの成長を実感できる点で、大きな意義があると考えたからである。実際に4年生児童は、「自分は話すことが苦手である」と気がつき、「来年は1つの行事で一人に声をかける」という具体的な目標設定を行っていた。その場限りの振り返りで終わるのではなく、継続的な評価・改善を行いながら次の目標設定につなげる仕組みの必要性を感じている。キャリアパスポートの項目を工夫するなど、小学校から中学校の9年間を通じて自己の成長を実感し、さらなる成長へつながる仕組みを整えていくことが求められる。また、小学校6年生と中学校1年生に対するアンケートの後半は中学校へ

表2 玄洋校区つけたい力指標

低学年	中学年	高学年	中学校
・誰に、何のために書くのかを考えながら書く。 ・書きたいことをはつきりさせて、必要なことと読み替えて書く。 ・題材に合った表現方法を工夫して書く。 ・自分の意見に気持ちがあり活かしたりしながる書く。 ・読み返して、書き直しながら書く。 ・1分間に50字位の速さで正確に書く。 ・読みたい本を選んで読む。 ・書かれてることの内容を思い浮かべながら読む。 ・リズムを大切にしながら読む。 ・内容の大きいを捉えながら読む。	・内容の中心を明確にしながら、文章全体の構成を工夫して書く。 ・題材に合った表現方法を工夫して書く。 ・自分の意見に気持ちがあり活かしたりしながる書く。 ・1分間に50字位の速さで正確に書く。 ・読み返して、書き直しながら書く。 ・丁寧に読む。 ・登場人物の心情や状況や情景を味わいながら読む。 ・感想や意見をまとめて読む。 ・間に気をつけて読む。 ・段落相違の関係に着目しながら、叙述式を元に捉えながら読む。	・構成や表現の効果を考えながら書く。 ・目的や意图に応じて、詳しくしたりして書く。 ・自分の意見に気持ちがあり活かしたりしながる書く。 ・読みこなして書く。 ・送り次第や仮名遣いに注意して、学習した漢字を混じて書く。 ・目的に応じて図書資料を選んで読む。 ・登場人物の心情や状況や情景を味わいながら読む。 ・感想や意見をまとめて読む。 ・事実と感想、意見との関係を理解して読む。 ・文章全体の構成を捉えて要旨を把握し、摘要を基に捉えながら読む。	・読み手の立場に立てて、表現の仕方や文章の構成を工夫しながら書く。 ・読み言葉と書き言葉の違いを理解し、適切な言葉選びで書く。
・相手の表情などの様子をみながら聞く。 ・何について話しているかを考えながら聞く。 ・どれが大事なことかを考えながら集中して聞く。 ・話の内容や順序などのよいところをみつけながら聞く。	・まとまりに気をつけ聞く。 ・自分が伝えたいことは何か考へながら聞く。 ・話の中心や筋道に気がつけて聞く。 ・互いの考え方を比べながら聞く。 ・感想や意見を返しながら聞く。	・相手の意図を確かめながら聞く。 ・自分の立場や意見と比較しながら聞く。	・話の内容を正しくメモにとりながら聞く。 ・感想や意見をまとめながら聞く。 ・論理の展開などに注意して聞き、話しの考え方を理解しながらできる。
・相手が聞いているか確かめながら話す。 ・次の終わりまでははつきりと順序よく話す。 ・相手の話を内容にあわせて話す。 ・ていねいな言葉と普通の言葉を使い分けする。 ・相手に応じて声の大きさや速さを工夫して話す。	・相手や相手に合った言葉遣いをします。	・相手が納得しているか反応で確かめながら話す。 ・目的や立場に応じて、事柄が明確に伝わるように話す。 ・結論いや立場などは自分の組み立てを工夫して話す。	・資料や書類を用いるなどして、相手の反応を踏まえながら話すことができる。
・互いの話を心をもち、相手の発言を受けた話をつなぐ。 ・話題に沿って話し合う。 ・尋ねたり応答したりするなどして何人で話し合う。	・互いの発言の共通点や相違点に着目して、自分の考えをもつ。 ・司会などの役割を果しながら、グループや学年全体で話し合う。	・互いの立場や意見を明確にしながら、考え方を広げたりまとめたりする。 ・司会や提案などの役割を果しながら、進行に沿って話し合う。	・進行の仕方を工夫したりお互いの発言を尊重したりしながら、意見交換に向けて話し合うことができる。

の期待や不安を尋ねるものとし、この結果を教育活動に反映することで、中1ギャップの軽減につなげることをめざした。小中が連携した学習活動の充実とアンケート実施時期という点で改善の余地があると考えている。

実際にこうした子どもたちの評価が、実際の活動につながったのが2校の「中学0年生交流会」である。これまで修学旅行の発表会などで学んだことを共有する機会はあったものの、実際に触れ合い、互いを知る機会が少ない状況であった。アンケートの振り返りから、子どもたち自身が「もっと交流を深めたい」と感じていることが分かり、子どもたちが直接交流する様子を、学校運営協議会委員をはじめとする地域の方々や中学校の教員が見守る形で「中学0年生交流会」を実施した。さらにこの交流会には、子どもたちの実態を把握し、支援につなげるという目的も設定した。

実際に交流を経験した児童の感想として、「もともとの友情がさらに深まった」「コミュニケーションをとることができた」「地域の方や先生たちとも交流できた」といった声が寄せられ、当初の目的であった「交流を深めること」が達成されたといえる。児童の感想からはさらに「仲間と協力することの大切さを学び、達成感を得られた」「中学校に行くのが楽しみになった」といった進学への期待感の高まりも確認することができた。今回のアンケートと交流会の結果を踏まえ、今後も子どもたちの気づきを大切にしながら、交流の場を継続的に充実させていく視点の必要性を感じた。

学校・地域連携カリキュラムとは、社会に開かれた教育課程の視点をもとに、学校と地域が連携・協働する教育活動を体系的に示したカリキュラムである。原点に立ち返り、カリキュラムのブラッシュアップにつなげるために地域と直接意見を交わすことのできる合同学校運営協議会のテーマを工夫することとした。

令和5年度は2度合同学校運営協議会を開催した。学校・地域連携カリキュラムを中心に据え、1回目は『ふるさとを愛し、心豊かで自ら学ぶ児童生徒の育成』に向けて、玄洋中校区の特色を生かしたつながりのある取組（もの・ひと・こと）を考えよう！」をテーマに熟議を実施し、2回目にはそのアイデアを書き込んだ中学校区マップを作成した。実際にその中のアイデアが次年度の合同海洋学習、クリーン作戦につながり、子どもたちの学びを深めることができた。

4. 「関わる力」を育むカリキュラム・マネジメント

4-1 「自分ごと」「自分たちごと」として捉える意識の醸成

小中をつなぐグランドデザイン、スタンダードデザインをより自分ごととして考えることをめざした授業の実践について述べていく。

4-1-1 「めざす姿」の共有 本村っ子熟議

三宮（2018）は、メタ認知的知識を学習と教育に活かす方法として、精緻化リハーサルによる記憶力の向上を述べている。具体的には、自分と関連づけることや、自分で考え・選択するという行為が記憶の残りやすさにも影響するということである。3校共通重点取組事項として、「関わる力」の育成に焦点を当てるところとなつたが、子ども達は「関わる力」の必要性を感じているのだろうかという疑問がわいた。抽象的な言葉で表現されているグランドデザインについて自分たちで考え、具体化することがメタ認知につながるのではないか。学びの当事者である子どもたちが将来どのような力が必要だと考えているのか、児童の言葉で具体化すべく5、6年生を対象とした熟議を行った。ここではあえて「関わる力」の具体化を図る流れではな

小中一貫アンケート		本村小 名前()
(1) 今年度行った小学校両士、中学校との交流活動をふりかえって、満足度を答えてください。 【満足度とは？ 自分から進んで取り組むことができた、一緒に勉強してよかった、学びがわかったなど】		
交流学習	満足度	←その理由
水泳	%	
修学旅行(平和学習も)	%	
読書部便(中学校)	%	
あいさつ運動(中学校)	%	
平家踊り練習(中学校)	%	
老の山クリーン作戦	%	
中学0年生交流	%	
満足度の目安 90~100%:とても満足 80~89%:満足 60~79%:やや満足		
(2) 中学生生活で楽しみなことはありますか。 4 3 2 1 ある どちらかといえばある どちらかといえばない ない 【(2)で4~3を選んだ人】楽しみなことは何ですか。※丸は3つまで、1つでも2つでもOK		
① 新しい教科の勉強がある ② 教科によって先生がかわる ③ 新しい友達ができる ④ 先輩ができる ⑤ 部活動がはじまる ⑥ 中学校での学校行事がある ⑦ 西山の人と一緒に学べる、クラスメイトになれる ⑧ グループやペアの学び合いが増える ⑨ その他()		
4 3 2 1 ある どちらかといえばある どちらかといえばない ない 【(3)で4~3を選んだ人】不必要な理由は何ですか。※丸は3つまで、1つでも2つでもOK		
① 勉強が難しそう ② 定期テストが難しそう ③ 授業時間が長い(50分授業) ④ 教科によって先生がかわる ⑤ 新しい友達うまくいくか ⑥ 先輩とうまくいくか ⑦ 部活動がはじまる ⑧ 中学校での学校行事がある ⑨ 校則をきびしそう ⑩ 将来の道筋について考えなければいけない ⑪ その他()		

図2 令和5年度 小中一貫アンケート
(本村小6年生対象)

く、自分たちに必要だと感じている力と「関わる力」の共通点を考えることとした。自分たちが考えたという実感を持たせることを重視したからである。

まずは、熟議の経験がない子どもたちに熟議とは何かを伝えるスライドを作成し、共有を図った。また、必要な力をテストで測れる力である認知能力とテストでは測ることが難しい非認知能力と定義し、能力の視点を与えた。2つに分類しながら提示したことで、自主的に仲間分けをしながら考えるグループもあった。でてきた意見は図3の通りである。グランドデザインについても、平易な言葉で書き換えたものを提示し、「関わる力」とのつながりを捉えやすくした。

班で出た意見の中から最も必要だと思う力に絞った結果、以下のような意見が挙がった。彼らが将来必要だと考える力には、コミュニケーション力、忍耐力、集中力、行動力が挙げられており、それぞれの理由には具体的な場面や将来の社会生活への意識が反映されていることが分かる。特にコミュニケーション力は、他校との交流や中学校での人間関係を円滑にするために不可欠なスキルとして認識されており、対人関係の重要性が強調されている。また、忍耐力や行動力については、社会に出たときに諦めずに努力し、自ら主体的に動く力が必要だと考えていることがうかがえ、単なる学習面だけでなく、自己成長や困難を乗り越える力への関心が表れている。一方で、集中力に関しては、授業をしっかりと理解し学習を進めるために不可欠な要素として捉えられており、学習習慣や学校生活の成功に直結すると考えられている。さらに、子どもたちは自分の経験や近い将来の状況をイメージしながら必要な力を挙げており、単なる抽象的な理想ではなく、実際の場面を想定していることが特徴的である。こうした意識を踏まえると、授業や学校の取組では、実際の経験を通じて学べる機会を増やし、協力や対話の場面を多く取り入れることが、彼らの成長にとって効果的であると考えられる。

熟議後の児童の感想からは、自分自身を見つめ直し、今後の生活に活かそうとする意欲が強く感じられた。また、話合い活動に必要なスキルや経験の重要性を実感している様子も多く見受けられた。「関わる力」について考える中で、「関わること」の楽しさや難しさを体感していたことがうかがえる。ワークシートの最後には、特に自分が伸ばしたいと思う力を書く欄を設けたが、そこに「説明力」と記入した児童は、授業などの発表時にただ話すのではなく、相手に分かりやすく伝えることを意識し、具体的な学校での場面を思い浮かべて記述していた。これらのことから、先行研究で指摘されている学校教育目標や校訓といった概念的な言葉を具体化する必要性を改めて強く感じた。

4-1-2 学校評価結果を基にした代表委員会

子どもたちが具体的な根拠をもとに話し合いを行い、学校の課題を自分ごと、さらには自分たちごととして捉え、主体的に問題解決へ向かうことをめざし、学校評価結果を活用した代表委員会を実施した。自分たちの学校生活を客観的に振り返るため学校評価アンケートを活用した。児童だけでなく保護者の結果も提示することで、多様な視点から課題にアプローチできるよう工夫をした（図4）。さらに、話し合うグループを所属する委員会をもとに、教職員の組織と同様の知・徳・体の3つのグループに振り分けることとした（表3）。まず、数値データの見方を学ぶことから始め、数値から現状を分析し、その後、各委員会での取組へつなげるよう構成したワークシートを活用した。令和5年度は年度末の2月に実施したため、2~6年生と参加した学年に幅があったが、数値を根拠にすることで低学年の子どもたちも積極的に発言する姿が見られた。しかしながら、年度末であったことからその後の委員会の動きにつなげることが難しく、話し合って終わりになってしまったことが反省点として挙がった。

その反省点を踏まえ、令和6年度は委員会や学級での取組へと具体的に発展させることを意識して11月に同様の代表委員会を実施した。ワークシートも改善し、学校生活とつなげる視点として「クラスでできる

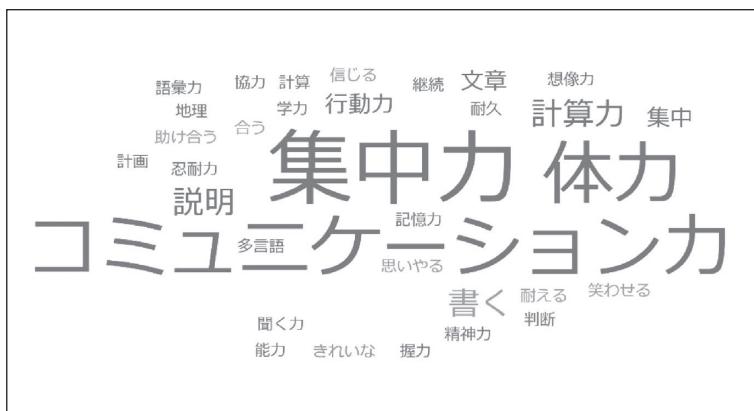


図3 「本村っ子に必要な力」テキストマイニング結果

こと」という項目を増やした。委員会で取り組めることだけでなく学級で取り組めることも議題としてすることで、学校全体での取組となつた。一部の話合いに参加した児童だけの当事者意識を高めるためなく、それを全体へと広げていくことが重要だとした前年度の反省が改善に活かされたと言える。また児童を委員会をもとに教職員組織とつないだことは、提案を実行に移す上で非常に効果的であった。ここに生徒、PTAの組織を振り分け、つながる相手を明確にすることは保護者や地域を巻き込んだ小中一貫教育の推進においても有効だと考えた。

学校アンケートの結果		児童		保護者	
		1学期	2学期	1学期	2学期
1	自分の意見をすすんで発表したり書いたりしている。	77	67	77	74
2	話を人の方を見て最後まで聞いている。	89	79	48	57
3	毎日、家庭学習をしている。	77	75	48	24
4	学校や家ですすんで、読書をしている。	73	63	77	89
<〈徳〉ごろろ>		1学期		2学期	
5	友達に、やさしい言葉で話しかけている。	79	81	82	88
6	「ありがとう」「ごめんなさい」が、すなおに言える。	92	88	85	73
7	次の時間の準備をして、チャイムもくそくをきちんとしている。	85	73	88	81
8	気持ちのよいあいさつをしている。	94	92	77	89
<〈体〉からだ>		1学期		2学期	
10	給食で、自分の食べる量を決めて完食している。	88	90	61	78
11	体育の授業や外遊び等を通して積極的に体を動かしている。	96	83	89	94
12	家の約束を守ってゲームやタブレットをしている。	83	73	82	72
13	規則正しい生活（早寝・早起き・朝ごはん・園みがき）をしている。	79	79	91	87
14	手洗いをしっかりしている。	94	90	84	78

図4 令和5年度代表委員会学校評価提示資料

表3 知・徳・体部会 組織図（案）

	知	徳	体
児童 (委員会)	図書委員会 放送委員会	飼育・栽培委員会 運営委員会	保険・体育委員会
PTA	学年総務・ 環境厚生部	学年総務・ 環境厚生部	広報・保育体育部
教職員 (校務分掌)	教務主任 研修主任	生徒指導主任 特別活動主任	保険主任 体育主任 給食主任
生徒 (専門委員会)	学習	総務	給食 保健環境

4-2 地域とともにを行う学校・地域連携カリキュラムのブラッシュアップ「みんなで考えよう本村の未来」

学校・地域連携カリキュラムを活用した小学校同士の連携については3章で述べてきた。ここでは、カリキュラムを活用した中学校を含む地域協育ネットの取組を述べていく。

教職員だけでなく児童や地域との学校・地域連携カリキュラムのブラッシュアップの場としての熟議を発案した。参加者は5、6年児童、教職員、学校運営協議会委員とし、参観日に開催することで保護者にも参観してもらうようにした。「本村をもっと生き生きと魅力ある町にするために自分たちにできること」というテーマで話し合うこととし、参加者が自分ごととして捉えやすいテーマになることを意識した。また、出てきた意見を「夢」「大人の力をかりてできうこと」「自分たちができること」の3つに分けながら話し合うことで、話し合いの視点を示した。時間と経験を考慮してファシリテーターは教職員がつとめることとしたが、あくまでもサポートの立場をとることや、学校運営協議会委員には事前に会の趣旨を伝え、事前に児童が思う「本村の地域のよさ、アピールポイント」とそのアピール方法について準備しているので、大人の立場から見た本村の魅力を伝えてほしいことや具体的なアドバイスをしてほしいことを確認した。事前の目的的共有である。

大人が入った初めての熟議ではあったが、事前授業を各クラスで行い、あらかじめ意見をもって臨んだことで発表に苦手意識をもつ児童も自分の考えを言うことができていた。地域の方も地域の今後の展望や願いを積極的に述べてくださり、児童が気がついていない地域の魅力にも触れることができた。また、熟議には学校運営協議会委員として中学校校長が参加していた。児童の話合いの様子を直接観て話合いを価値づける内容の感想を述べた。中学校への学習のつながりを意識した感想を児童に伝えることができた点も小中のつながりを児童に意識させる事へとつながった。

4-3 熟議から始まるカリキュラム・マネジメント

児童が一層主体的に取り組み、結果に対するフィードバックを通じて自己肯定感を高めることを目的とし、熟議を基盤にしたカリキュラム・マネジメントを発案した。以下に、その具体的な内容を述べる。

4-3-1 スタートアップ熟議

地域、保護者も参画する児童の主体性を高めることを意識したカリキュラム・マネジメントに取り組んだ。令和6年4月8日、プロジェクト会議を高学年担任、教務主任、筆者で実施した。初めに、児童の意見をできる限り反映させ、その意見を具現化していくことを確認し、「関わる力」の育成を意識した取組であることを確認した。会議では、「スタートアップ熟議」と題し、年度最初の参観日に4・5・6年児童、保護者、学

校運営協議会委員、教職員が参加する形で実施することが決定された。また、参観日であることを踏まえ、保護者の参加は任意とすることも決まった。話合いで最も多くの時間を費やしたのはテーマ設定である。児童が話合いに積極的に参加したいという意欲を高めることを意識し、「〇〇したいを現実に！ ver. 150～友達や地域と関わりながら～」というテーマが設定された。

振り返ると、このプロジェクト会議の時間を設けたことは非常に有意義であったと感じている。前年度の熟議と比較し、教職員の話し合いに対する姿勢に違いを感じた。その違いは、立案の段階からチームで行ったことに起因していると考える。意見を交わして立案する過程に自分が関わり、「自分が作った」という実感や経験が教師の当事者意識を高めたことを実感した。

令和6年4月18日（金）のスタートアップ熟議では、ファシリテーションについて事前指導を行った成果もあり、児童が中心となって話合いを進める班が多くみられた。話合いの輪に加わる保護者も多く、創立150周年をみんなで盛り上げたいという思いは同じであることを実感した。

熟議に臨む前に児童が立てためあてを分析すると、多くの児童が「言う」「発表」といったキーワードを用いており、「関わる」こと＝自分の考えを述べる、自己発信として捉えていることが分かった。特に6年生では、「司会」というキーワードが多く見られ、話合いをまとめる役割への意識が高まっていたことがうかがえる。実際に6年生のめあての中には、「司会・進行係として、同じふれあい班だった〇〇さんみたいにみんなをまとめるようにする。」という記述があった。〇〇さんは1学年上の先輩であり、前年度の熟議で司会として進行する姿に憧れ、自身の目指す姿として具体的にイメージしていたと考えられる。

のことから、異学年集団が一緒に活動する機会を継続することは、9年間の学びのつながりと深化において非常に有効であるといえる。年上の先輩の姿が、年下の児童にとってのロールモデルとなり、自己の成長目標として意識されることで、児童の主体的な関わりやリーダーシップの育成にもつながっている。

4-3-2 本村タイム

令和6年度は2・3年、4・5年の変則複式学級が2学級となり、複数学年を担任ではない教員が授業を行うことが増えた。総合的な学習に関しても3・4年生が教頭、5年、6年は担任が担当し、生活科は1年担任が1・2年生の授業を行っている。そのため必然的に全校の日課を揃えなければならず、総合的な学習の時間と生活科の学習を同時に使う「本村タイム」を設定した。スタートアップ熟議でたアイデアからカリキュラムを構築することとねらいの共有を目的としたプロジェクト会議を授業を担当する教員全員で行った。熟議の意見から各学年の学習内容をおおまかに絞り、学年間の重なりがないようにした。各学年の学習内容は以下の表4の通りである。

表4 本村タイム単元計画

学年・教科	学習内容
1・2年 生活	「本村小のひみつをみつけよう」 校内の自然や校舎の秘密を見つける
3・4年 総合	「本村の地いきじまん」 町探検をして本村地域の店や企業について学ぶ
5年 総合	「みんなにやさしい町づくり」 高齢者にも優しい町について考える
6年 総合	「創立150周年記念式典をもりあげよう」 学校の歴史を学び、地域とともに150周年を盛り上げるイベントを企画し、運営を行う

具体的な各学年の学習の様子や学年を越えた取組について、以下に述べる。

本村小学校には40年間続く「平家踊りを受け継ぐ子の会」という会があり、児童だけで音頭、三味線、太鼓の演奏を行い、全校児童が伝統芸能である平家踊りを踊ることができる。毎年の運動会や平家引継ぎ式等で演奏し、地域と一緒に踊ってきたが、児童数の減少によって踊りの輪が縮小され、寂しさを感じていた。熟議の中でも「平家踊りで地域を盛り上げたい」という意見が出て、課題意識を持って取り組んだのが5年

生である。参加を呼び掛けるスライドを作成し、対象としては身近な中学生を選んだ。運動会前に中学校の全校集会に直接出向き、呼びかけを行った。その成果もあってか、運動会には西山小出身の中学生も参加し、多くの地域の方と踊ることができた。児童は「PRはとても緊張したけど5人がいたからとても話しやすかった。運動会にたくさん来てくれたのを見て、やってよかったと思った。これからも本村小のいいところを伝えられるようにがんばっていきたい。」と達成感を感じており、次の活動への意欲が向上したことが分かる。

6年生は「150周年記念式典を盛り上げよう」という目標のもと、人文字撮影を発案した。人文字の図案を考え、ICTを活用して全校投票を行い、複数の候補からデザインが決定した。また教職員を合わせても人数が足りないという問題に気づき、中学校を含めた地域に協力を呼びかけようとポスターを作成したり（図5）、PR動画を作成し、中学生に視聴してもらう機会を設けたりし、意欲的に学習を進めていった。

ここまで活動は児童の意欲を大切にし、主体性を活かした学習として進められてきたが、中学生に対する呼びかけの後に学習活動が停滞するという課題が生じた。その背景には、児童の中に「あとはこちらがやってくれるだろう」という受け身の意識が芽生えたことや、教職員側にも児童に任せるとする視点が薄れ、教師主導で進めようとする姿勢が見られたことがあった。そこで、改めて児童の主体性を重視する必要があると提案し、児童自身が運動場のデザインを下書きしたり、当日の誘導や運営を担ったりするなど、活動の中心となるように工夫した。その結果、予想を上回る人数が集まり、当初は予定していなかった文字まで人文字で表現することができた（図6）。この経験を通じて、児童は達成感や自己肯定感を高め、主体的に行動することの意義を実感することができた。

これらの実践を通して、教師の役割について改めて考え直す機会となった。児童主体の学びをめざしているにもかかわらず、「やらなければならない」「こうあるべきだ」という思いが強くなり、気づかないうちに教師主導の進行になってしまうことがある。人文字撮影の取組においても、運動場への事前の下書きや当日の運営は、教師が児童に役割を与える形になり、児童自身が「何が必要か」を考える機会を十分に与えられなかつた。また、新しい取組に対しても「教師がやらなければならない」と思い込み、多忙感にとらわれていた場面が多くあった。児童の主体性を引き出すためには、教師自身が「子どもに任せる」という覚悟を持つことが重要である。たとえ失敗したとしても、その経験と共に振り返り、学びに変えて次の成長へつなげることが、教師に求められているのではないだろうか。

また創立150周年記念式典準備委員会の活動の様子から、熟議という方法が関わる人の当事者意識を高めることに有効なことを確かめることができた。熟議で子どもたちと思いをぶつけ合った保護者や地域の方が、子供たちの思いを実現させようと積極的に活動していた。熟議の中でアイデアとして挙がったものの児童には難しいSNSの運営を準備委員会が行い、児童がポスターを作成して情報発信を行った。また児童の学習の様子をSNSで発信し、価値付けて認めてもらえた子どもたちはますます意欲的に学習に取り組むようになるという好循環がうまれた。

「本村タイム」「創立150周年記念式典」終了後、学習に対する満足度とともに自分についた力、さらに伸びた力という視点をもって学習を振り返った。これまでの学習の歩みを振り返るために、活動の様子をまとめた映像を作成し、全員で視聴した後、個人で振り返りシートに記入する時間を設けた。担任2人と筆者は児童の様子を見守り、書く内容に悩む児童には具体的に「関わる力」が發揮されていた場面を伝え、価値づけながら個別に助言を行った。しかし、メタ認知が難しいA児は教師の助言を受けてもなかなか記述が進まなかつた。そこで、一緒に活動していたB児に助言を求めるよう促したところ、B児の言葉に納得し、自身の成長した点を見つけて記述することができた。この経験から、教師の支援だけでなく、児童同士の関わ

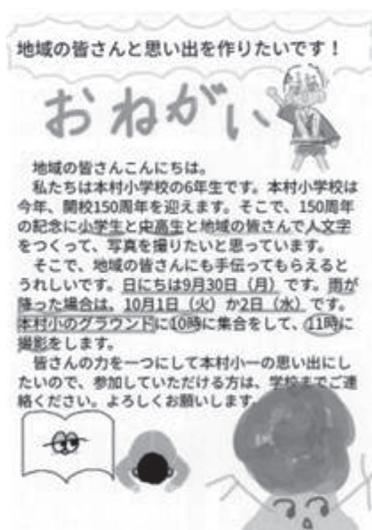


図5 人文字参加呼びかけポスター

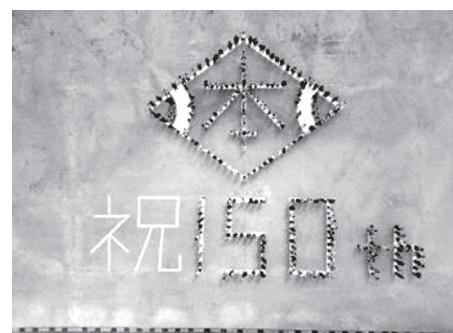


図6 150周年記念人文字

りが自己の成長を見つめ直すきっかけとなることを改めて実感した。

「本村タイム」での学習を通して、一番ついた、一番伸びたと思う力はという問い合わせに対する児童の回答は以下の通りである。

表5 本村タイムを通して高まりを感じた力

・自分たちで考える力
いつも授業では先生がついていたけど、本村タイムでは先生たちにたよらず、グループの人と協力して発表の準備をすることができたから。
・人から言われなくても自分から行動する力
150周年の準備を先生たちがしているときに自分から「手伝いましょうか」というのがよかつたと先生たちが言っていました。大変そうなときには自分から伝えた方がよいと思いました。○○さんや□□さん（同級生の名前）みたいに自分から手伝いたいと思います。
・文を考える・声を大きく出す力
タブレットで文を早く作れたり打てたりできるようになった。そして劇では自分の声を大きく出せるようになった。さらに劇の言葉を覚えることができたのでよかったです。
・人に発表する力
中学生に人文字に協力してくださいと動画で伝えることができたから。
・率先して行動する力
人文字を作った時、代表して地域の方に感謝のメッセージを伝えたり、平家踊りでは募金の呼びかけや記念式典にぜひ来てくださいなど率先して行動する力が付いたと思う。

児童の回答からは、主体的に考え方行動する力やコミュニケーション力の成長が見られた。特に、本村タイムや150周年記念行事など、教師の支援が少ない場面で自分たちで考え、グループで協力して発表準備を進めた経験が自主性や主体性を育んでいたと言える。また、地域行事に参加し、自分から進んで声をかけたり、募金活動や感謝のメッセージを発信したりするなど、相手を意識した行動ができるようになっており、他者と関わる力や社会性の高まりを感じた。多様な学びの機会が連動し、学習が実生活や社会と結びつくことで、子どもたちは主体性、協働性、表現力といった幅広い力を着実に伸ばしていると言える。これらの力をさらに伸ばすためには、より多様な意見交換の場や、自主的な学びの深化を図る活動を充実させることが有効だと考えた。

5. 研究のまとめと今後の方向性

本実践研究では、小中一貫教育を充実させるためのシステム構築について焦点を当てながら、小中一貫教育を通じて児童生徒の「関わる力」を育むためのカリキュラム・マネジメントのあり方を検討してきた。その結果、得られた知見を以下に述べる。

1点目は学びの可視化と評価規準の整備についてである。「関わる力」を具体的な指標に基づいて可視化した取組は、授業者や参観者にとって共通の理解を得るために重要な手法となった。授業内での児童の発言や行動を「話し合う力」「聞く力」などの指標に基づいて評価することで、学習者の成長を客観的に捉えることが可能になった。その指標を児童生徒、教職員、地域で共有することが、小中一貫教育の充実につながると考えられる。また、その指標についても評価を行い、改善しプラッシュアップしていくなければならない。評価をもとにした分析に教職員だけでなく児童生徒も取り組むことで、当事者意識をもって学びに向かうことができるだろう。このような評価基準の整備は、教育活動全体の質の向上に寄与すると考えられる。

2点目は地域資源の活用と持続可能な連携についてである。合同学校運営協議会やスタートアップ熟議の開催などの地域の教育力を積極的に活用した取組は、児童の自己肯定感や地域への愛着心を育む上で大きな効果を發揮した。地域住民との交流や地域資源を取り入れた学習活動を通じて、児童は多様な価値観に触れる機会を得た。

3点目は小中一貫教育を推進するためのシステム作りについてである。成果としては、3校合同の学校運

嘗協議会や小小連携会議を通じて、共有の目標設定と役割分担を明確化するシステムが構築されたことである。ICTツールを活用した効率的な情報共有やカリキュラム・マネジメントの実践を行い、学校・地域連携カリキュラムを中心に置いたシステムが構築されつつある。また「しものせき版小中一貫教育ステップ表」を基盤にした進捗管理が、各校での取組を統一的に評価・改善する仕組みとして機能したことも成果である。

今後は、中学生のリーダーシップ育成や教育活動の成果を継続的に検証する仕組みの構築に取り組む必要がある。また、地域との連携をさらに強化し、小中一貫教育が地域全体の教育力向上につながるモデルを目指していくことが求められる。まずは、活動の成果をコミュニティ・スクール全体で共有するシステムの整備を進めていきたい。今回の実践では、「関わる力」を観る視点を事前に子どもたちに示し、その視点に基づいて個人目標を設定する機会を設けた。活動後には、満足度を100点満点で自己評価させ、自身の「関わる力」をメタ認知できるよう意識しながら取り組んできた。しかし、それぞれの学習活動が別個のものとなり、つながりが途切れる場面が見られたことから、学びの蓄積という点でさらなる改善が必要だと感じた。育成すべき力を「関わる力」と明確に位置づけ、それが児童生徒にとっても評価の一貫性を持つ形で示されることで、自己の成長をより実感できるようになると考える。例えば、9年間の学びのつながりをキャリアパスポートなどで支え、児童生徒がメタ認知力を伸ばす支援を行うことが必要である。学びの当事者は子どもたち自身である。自己の成長を実感しながら当事者意識を高く持って学ぶ姿をめざしていきたい。

おわりに

「いくら良い土を用意して水をまいても、種をまかなければ芽も出ないし花も咲かない。」本実践研究を通じて子どもたちの中にメタ認知の視点を与えること、つまり自分を見つめる「種」をまくことの重要性を痛感した。それが主体的な学びにつながり、9年間の系統性ある学びを通じて、子どもたち自身が成長を実感し、自ら学び続けることのできる環境づくりに直結するのだと感じた。子どもたちとともに、その学びを「育てる」姿勢を忘れず、これからも教育の現場で実践を重ねていきたい。

付記

本論文の内容は、野母佳澄が執筆した山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻の実践研究報告書に加筆・修正を加えたものである。もう一人の筆者、静屋智は野母佳澄の指導教員として適宜アドバイスを与えるとともに、本論文執筆に際しては、全体の総括及び部分的な修正の指示を行った。

参考文献

- 工藤勇一・青砥瑞人：『自律する子の育て方』，SB新書，2021
三宮真智子：『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める』，北大路書房，2018

Web掲載資料

- 一般財団法人日本生涯学習総合研究所（2022年9月1日）「『非認知能力』の概念に関する考察〈集約版〉」
https://www.shogai-soken.or.jp/wp/wp-content/uploads/2022/10/non-cog3_202209.pdf
(2025年2月7日確認)

(資料1) しもせき版小中一貫教育 ステップ表 玄洋中校区版

しもせき版
小中一貫教育 ステップ表
玄洋中校区版



共通学校教育目標：「ふるさとを愛し 心豊かで 自ら学ぶ児童生徒の育成」
共通研修テーマ：9年間をつなぐ「関わる力」の育成
～自らの意見をもちともに学び合う授業づくり～

①グランドデザイン 学校教育目標	②組織づくり	③CS	④校内研修	⑤学習指導	⑥生徒指導 (★心の教育)	⑦学校行事 (児童会・生徒会活動)	⑧体育・保健関係
⑨総務	⑩知	⑪徳	⑫体				
<p>□ 中学校区としてのグランドデザインが行われ、各校主任が中核となり日々の教育活動において具現化され、児童生徒と共に開催されている</p> <p>□ 目標を可視化する評価項目・指標を立てPDCAサイクルに基づく取組改善をしている</p> <p>【一貫期】 小1→中3</p>	<p>□ 小中合同の学校運営協議会を開催している</p> <p>□ CSの仕組みを生かしたネットワークが形成され、地域と連携した教育活動を主導して実施している。</p> <p>□ 地域、保護者等へ向けた情報発信が充実している</p> <p>□ 中学校区合同で地域連携カリキュラムの検証、改善への取組が行われている。</p>	<p>□ 中学校区で共通の研修主題を定期的に開催している</p> <p>□ 研修実践に基づき評価し、授業研究、研修計画を実施することができている</p> <p>□ 研修を援助訪問等の日程を調整し、全職員で参観・研修体制づくりができる</p> <p>□ 共通の学習のきまりを設定し、PDCAサイクルに基づく取組改善をしている</p> <p>□ 定期的、計画的な乗り入れ授業(教科担任制等)が実施されている</p>	<p>□ 定期的に合同の生徒指導委員会を開催している</p> <p>□ 生徒会活動が運営されている児童会・生徒会活動が実施されている</p> <p>□ 合同での活動や、練習活動など工夫された形態で計画的な実施がなされている</p>	<p>□ 9年間を見通した児童会・生徒会活動の調整がなされている</p> <p>□ 中学校区で道徳の共通の内容項目について、連携した実践がなされている</p> <p>□ 中学校区で活動や、練習活動など工夫された形態で計画的な実施がなされている</p>	<p>□ 9年間で児童会・生徒会活動が実施している</p> <p>□ 中学校区で児童会・生徒会活動が実施されている。(メティア)</p> <p>□ 中学校区で共通の保健・健康的な課題解決のため、合同学校保健委員会や講演会などを実施している。(保健)</p>		
<p>□ 目指す子ども像が共有され、中学校区のグランドデザイン、教育目標が決定されている</p> <p>【一貫期】 小1→中3</p>	<p>□ 小中学校で共通した校務分掌や部会(知・徳・体など)があり、全教職員が関わる連携がある(学年別に程度)</p> <p>□ 中学校区の学校・地域連携カリキュラムを作成している。</p> <p>□ 中学校区にに関する便り等が発行されている。</p>	<p>□ 目指す子ども像が共有され、地域で役割分担をしている</p> <p>□ 全教職員が連携する連携がある(学年別に程度)</p> <p>□ 中学校区の学校・地域連携カリキュラムが作成されている。</p> <p>□ 時間割や日課表を工夫してお互いの学校を行き来しやすい体制づくりが行われている</p>	<p>□ 9年間の系統性・連續性を重視し、発達の段階に応じた継続的な各教科の横つなぎがあり、各教科の横つなぎを編成する意識したカリキュラムを構成している</p> <p>□ 中学校区で家庭学習(学び)の引きを意識した取組が漫透している</p> <p>□ 中学校区共通の学習のきまりを定めている</p>	<p>□ 9年間の段階に応じた継続的な指導のよさを交換することでできている</p> <p>□ 共通の内容項目が設定されている</p> <p>□ 中学校区で生徒指導委員会が開催されている(学年別に程度)</p>	<p>□ 中学校区で合同行事が開催されている(防災訓練、クリーン作戦、あいさつ運動、遠足等)(複数回)</p> <p>□ 中学校区で道徳の重点目標として共通の内容項目が設定されている</p> <p>□ 中学校区で生徒会活動が行われたり、学校運営協議会に児童生徒が参画している</p>	<p>□ 中学校区で新体力テストの結果を分析し改善するための取組を行っている。(体力向上)</p> <p>□ 中学校区で体育祭・運動会の一環で児童生徒が参加している。(体育的行動)</p> <p>□ 定期的に児童会・生徒会による合同の活動が行われたり、学校運営協議会に児童生徒が参画している。(メティア)</p> <p>□ 中学校区で共通の保健・健康的な課題解決のための取組を行っている。(保健)</p>	
<p>□ 小中学校の教職員間で中学校区としての教育課題を捉えることができている</p> <p>【ステップ】 小6→中1 小3→中3</p>	<p>□ 各校のグランドデザインが共有されている</p> <p>□ 各校の校務分掌等の情報を共有し、連携していく</p> <p>□ 各校の校務分掌等の情報を共有し、連携していく</p> <p>□ 各校の校務分掌等の情報を共有し、連携していく</p>	<p>□ 学校運営協議会において、学校と保護者、地域で熱議が行われ、協働して目標設定がなされている</p> <p>□ 各校の学校・地域連携カリキュラムが共有されている。</p> <p>□ 中学校区で互見授業が実施されている</p> <p>□ 中学校区で行事予定や学校便り等が共有されている。</p>	<p>□ 9年間で児童生徒に育成した知識と保護者、地域で熱議が行われ、協働して目標設定がなされている</p> <p>□ 各校の学校・地域連携カリキュラムが共有されている。</p> <p>□ 中学校区で各校の学習に関するきまりを共有している</p> <p>□ 中学校区で各校の学習に関するきまりを共有している</p>	<p>□ 共通課題を明らかにして、小・中学校間で共有している</p> <p>□ 小中共通の重点取組事項(生徒指導)がある</p> <p>□ 児童会・生徒会活動に関するきまりを共有している</p> <p>□ 小中学校で、児童生徒についての情報交換がてきている</p>	<p>□ 中学校区で新体力テストの結果を分析し改善するための取組を行っている。(体力向上)</p> <p>□ 中学校区で体育祭・運動会の手伝いを行なって貯めし物や準備の手伝いを行なっている。(体育的行動)</p> <p>□ 中学校区で共通のメティア・コントロール目標を設定している。(メティア)</p> <p>□ 中学校区で共通の保健・健康的な課題を把握している。(保健)</p>		

(資料2) 令和6年度 玄洋中学校区 つけたい力

	低学年	中学年	高学年	中学校
進んで書く力	<ul style="list-style-type: none"> ・誰に、何のために書くのかを考えながら書く。 ・書きたいことをはっきりさせて、必要なことをくわしく、順序よく書く。 ・読み返して、書き直しながら書く。 ・1分間で30字位の速さで正しく書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の中心を明確にしながら、文章全体の構成を工夫して書く。 ・題材に合った表現方法を工夫して書く。 ・文章の良さに気付いたり活かしたりしながら書く。 ・1分間に50字位の速さで正確に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・構成や表現の効果を考えながら書く。 ・目的や意図に応じて、簡単にしたり、詳しくしたりして書く。 ・考えたことや伝えたいこと、感じたことや想像したことなどを書く。 ・送り仮名や仮名遣いに注意して、学習した漢字を使って書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み手の立場に立って、表現の仕方や文章の構成を工夫しながら書く。 ・話し言葉と書き言葉の違いを理解し、適切な言葉遣いで書く。
豊かに読む力	<ul style="list-style-type: none"> ・読みたい本を選んで読む。 ・書かれていることの内容を思い浮かべながら読む。 ・リズムを大切にしながら読む。 ・内容のだいたいを捉えながら読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマにそった読み物を適切に選んで読む。 ・書かれた内容について感想や意見をまとめて読む。 ・間に気をつけて読む。 ・段落相互の関係に着目しながら、叙述を元に捉えながら読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて図書資料を選んで読む。 ・登場人物の心情の変化や情景を味わいながら読む。 ・事実と感想、意見との関係をどうえて読む。 ・文章全体の構成を捉えて要旨を把握し、描写を基に捉えながら読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な立場や考え方方が書かれていることを知り、自分の考えを広げたり深めたりしながら読む。 ・目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得ることができる。
確かに聞く力	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の表情などの様子をみながら聞く。 ・何について話しているかを考えながら聞く。 ・どれが大事なことか考えながら集中して聞く。 ・話の内容や順序などのよいところをみつけながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まとまりに気をつけて聞く。 ・自分に伝えたいことは何かを考えながら聞く。 ・話の中心や筋道に気をつけて聞く。 ・互いの考えを比べながら聞く。 ・感想や意見を返しながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話の内容を正しくメモにとりながら聞く。 ・感想や意見をまとめながら聞く。 ・相手の意図を確かめながら聞く。 ・自分の立場や意図と比べながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて記録したり質問したりしながら、話の内容を理解することができる。
はつきりと話す力	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が聞いているか確かめながら話す。 ・文の終わりまではっきりと順序よく話す。 ・相手の話の内容にあわせて話す。 ・ていねいな言葉と普通の言葉を使い分けて話す。 ・相手に応じて声の大きさや速さを工夫して話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話の要点が伝わるように大事なことを先に話す。 ・相手や目的に応じて、理由や事例を挙げながら話す。 ・相手を納得させるために内容や方法を工夫して話す。 ・相手や場に合った言葉遣いを話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が納得しているか反応で確かめながら話す。 ・目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話す。 ・結論や山場などは話の組み立てを工夫して話す。 ・目的や場に応じた適切な話し方で話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場の状況に応じて自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができます。 ・相手や場に応じた言葉遣いを理解し、適切に使うことができる。
ともに話し合う力	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐ。 ・話題に沿って話し合う。 ・尋ねたり応答したりするなどして少人数で話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの考え方の共通点や相違点に着目して、自分の考えをもつ。 ・司会などの役割を果たしながら、グループや学級全体で話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの立場や意図を明確にしながら、考えを広げたりまとめたりする。 ・司会や提案などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の立場や考えを明確にし、論理の展開などを考えて話の構成を工夫することができます。 ・論理の展開などに注意して聞き、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめることができます。